

1 郷土の俳人

美濃口春鴻

美濃口春鴻は享保十八年（一七三三）に、下飯田村の美濃口源左衛門の子として生まれた。幼時は虎松、のち源吾次と称した。

美濃口家は代々名主を勤め、また村制が布かれてからは村長も勤めた家柄であったから、人の出入りも多く、また公私を問わず外出することもたびたびで、世間の文人との交流も多かったであろう。

そんな環境の中で育った源吾次は、いつしか俳諧に心を奪われていった。

俳句は俳諧連歌の第一句、即ち発端の句五、七、五が独立したもので、当時は発句と呼ばれていた。そしてこの作句法や一巻きのまとめ（句会での作品の記録）、礼儀作法等を指導する人を宗匠そうしやうといい、資格を取ると夜半亭蕪村、老鼠堂永機、香風軒井蛙などと名乗った。一代限りの庵主もいれば襲名して何代も続く庵もあるが、句に手を染めたからには誰しもこの宗匠になるのが夢であった。

戸塚の古い俳人としては鶏父けいふ（享保十九年、矢沢生まれ）の名があげられるが、ほぼ同年齢の源吾次は身近な鶏父に俳諧の手ほどきを受け、自宅の門前を流れるささ流れ（細

流）から春江と名乗ったのであろうか。

この頃の相模俳壇は大磯の鳴立庵なりたつあんが中心であった。諸国行脚をした平安末期の歌人西行法師の詠んだ

心なき身にも哀れは知られけり

鳴立さわの秋の夕暮

の聖地を記念すべく小田原の崇雪そうせつが標石を建てて庵を結んだ。のち西行五百年忌を念じて伊勢の三千風みちかぜが中興したが、俳諧道場としてその名を全国にひびかせたのは、相模在住の弟子一同の要請により、江戸で松露庵を結んでいた白井鳥醉ちゆうすいが入庵したからだといわれている。鳥酔の師の柳居りゅうきは、だじゃれや譬喩ひよの流行を、芭蕉の正風俳句に戻そうと努力した人で、その弟子の鳥酔のもとに、新進気鋭の士が結集するのは極めて当然のことであった。春江は鶏父が庵主の二之日庵連衆（一師系の仲間）の一人として鳴立庵の句筵くえん（句会）に加わり、広い世間を見て眼からうろこが落ちる思いであったろう。

鳥酔没後の鳴立庵は、松露庵烏明うめい社中の百明ひやくめいが継いたが、鳥酔門の白雄しろおが江戸に春秋庵を樹立したことにより相模のおおかたの連中（雑多な師系の仲間）はその傘下に走り、鳴立庵は一時的にさびれた。百明没後は、小田原生まれの柴居しばいが継ぎ、春秋庵社中の相模俳壇の中心となった。柴居の没後は、安永三年（一七七四）に春江から「春鴻」に改

名し、露柱庵の庵号を掲げていた春鴻を後見人として、白雄の晩年の弟子の葛三が継ぎ、その後を春鴻の弟子である雉啄が継いだ。

春鴻はこのように庵主にはならなかったが、鳴立庵を立派に守り、よき後継者を養成して享和三年（一八〇三）七十一歳を一期としてこの世を去った。

その遺句は

長啼や根水もちたる草の虫

馬つなぐ庇柱やふゆ日かけ

紅梅や雨ふきかけし上草履

ほか七百句余におよぶ。

なお白雄門における美濃口春鴻の位置について、白先は「春秋庵の春鴻ははせを（芭蕉）庵の去来也と世にふかくいへる云々」と述べているが、去来といえはかの有名な嵯峨の落柿舎の庵主で、蕉門の十哲の一人である。芭蕉も去来の庵に逗留して、有名な嵯峨日記を残した。

白雄の句の中に、

焚火してもてなされたる梅雨入かな

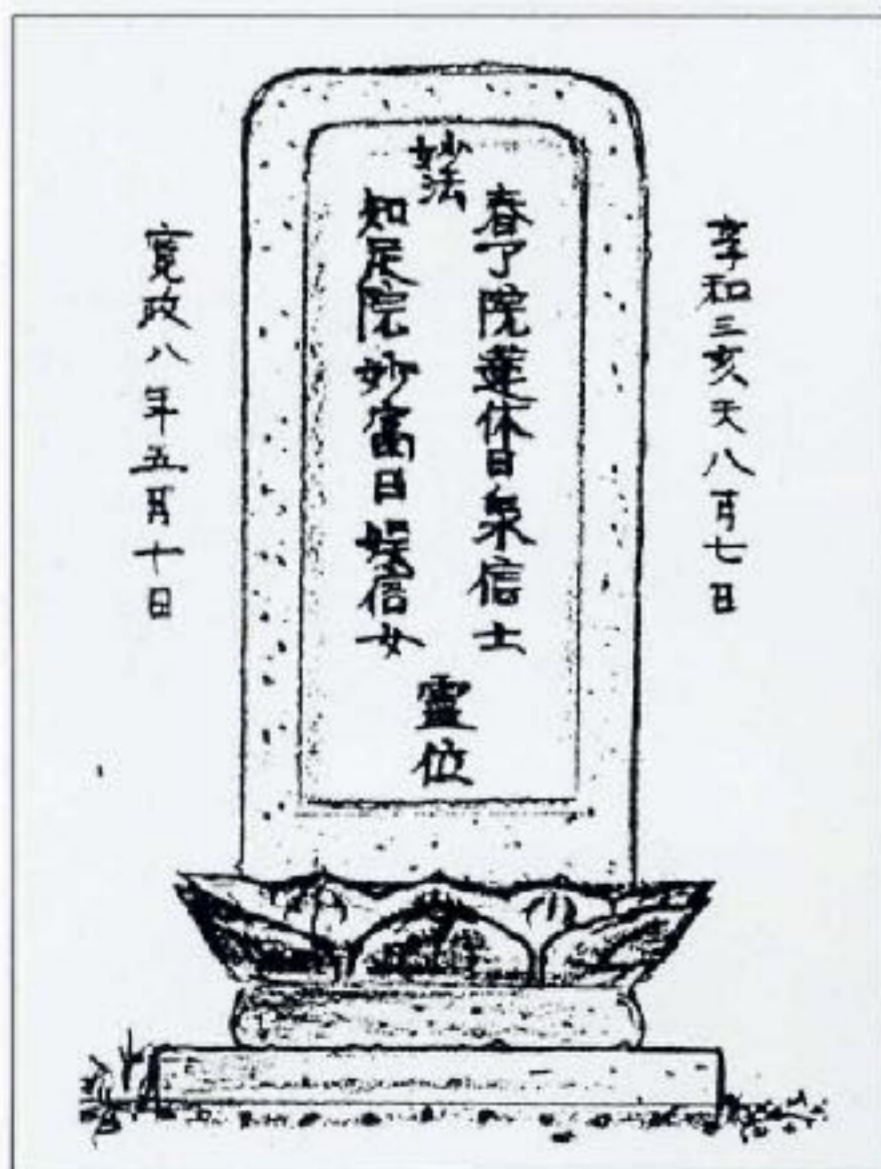
というのがあがるが、或いは戸塚の句会に招かれた時の作かも知れない。

美濃口春鴻の墓は下飯田の生家の東方美濃口家一門の墓地にあり、春了院蓮休日泉信士と記されているが、春鴻の夫

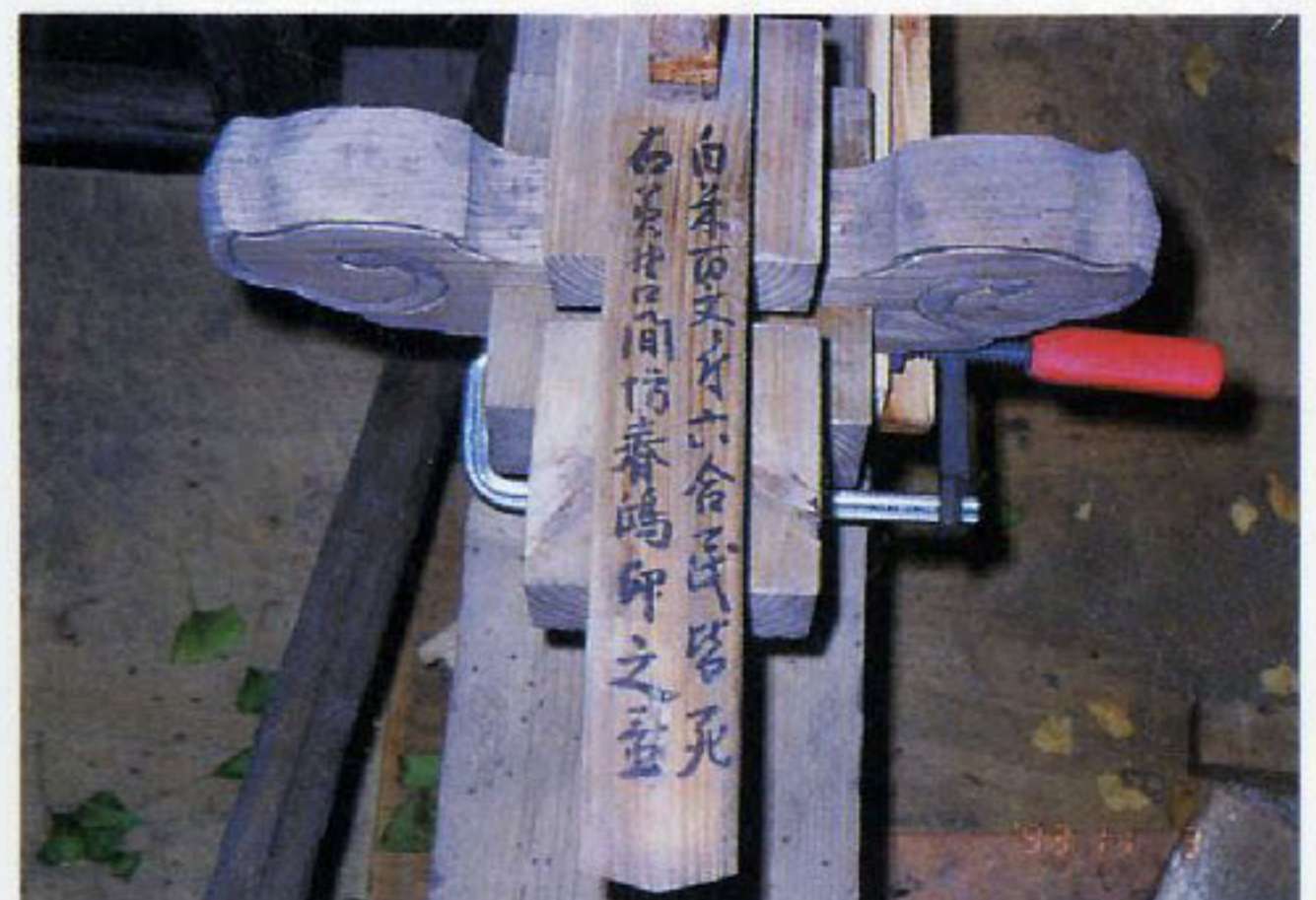
人の法名が「知足院妙富日□信女」となっている。兩名の字句を何度も読み下しているうちに、女流俳人「知足」と春鴻は夫婦であったのかなと思つた。

いま鳴立庵は、逗子在住の草間時彦氏が第二十一世庵主になつている。草間時彦氏は大正九年生まれで、石田

波郷、水原秋桜子に師事し、俳人協会の理事長を長い間務めた貴公子である。



美濃口春鴻の墓のイラスト



東泉寺山門の肘木に書かれた春鴻の直筆